

[5] イラン

1. イランの概要と開発課題

(1) 概要

- (イ) 1997年8月より2期8年続いたハタミ政権は、「市民社会の形成」を目指し、保守派の激しい抵抗を受けつつも諸改革の推進を試みてきた。しかし国民は改革の遅々たる進捗から政治に無関心となり、また経済の状況に不満を抱くようになり、2003年2月の第2期地方議会選挙では全国主要都市で保守派が圧勝、また2004年2月の第7期国会選挙においても多数の改革派候補者の立候補が認められない中、保守派が大勝した。そして2005年6月の第9期大統領選挙においても保守派のアフマディネジャード・テヘラン市長が勝利し、国政の全権において保守派が権力を掌握することとなった。
- (ロ) 外交面では、アフマディネジャード大統領の外交政策には未知数な部分が多い。インド、中国等との特にエネルギー分野における経済交流が活発化している。一方で、国際社会には、核問題、中東和平プロセスへの反対、人権問題等に関する懸念が存在しており、更なる努力がイランに求められている。
- (ハ) 経済面では、2004年10月に新たに策定された第4次経済社会文化開発5か年計画（2005～2010年）を実施している。イランの原油確認埋蔵量は1,325億バレル（2004年末時点）で世界の11.1%を占め、我が国にとって第3位の原油供給国である（2004年シェア15.0%）。

(2) 「第4次経済社会文化開発5か年計画」

イラン・イスラム憲法に基づいて長期計画に従った経済運営が行われている。1989年に最初の5か年計画が策定され、現在は2005年3月～2010年3月までを対象とした第4次経済社会文化開発5か年計画が実行されている。

第4次5か年計画では、長期的・安定的な雇用創出、世界経済との調和に基づくイラン経済の発展、国際競争しうるダイナミックな産業構造の育成等が掲げられている。

計画期間中、年率8.1%の経済成長を達成することを目指している。この目標を達成するためには3,870億ドルの投資が必要とされており、約3,560億ドルを国内資本、約310億ドルを海外からの投資によると見込んでいる。

イラン

表－1 主要経済指標等

指 標		2003年	1990年
人 口 (百万人)		66.4	54.4
出生時の平均余命 (年)		69	65
G N I	総 額 (百万ドル)	137,321	120,782
	一人あたり (ドル)	2,010	2,590
経済成長率		6.6	11.2
経 常 収 支 (百万ドル)		2,063	327
失 業 率 (%)		—	—
対外債務残高 (百万ドル)		11,601	9,021
貿 易 額 ^(注1)	輸 出 (百万ドル)	40,254.00	19,741.00
	輸 入 (百万ドル)	39,320.30	22,292.00
	貿 易 収 支 (百万ドル)	933.70	-2,551.00
政府予算規模 (歳入) (十億リアル)		333,571.07	6,617.00
財 政 収 支 (十億リアル)		17,883.70	-671
債務返済比率 (DSR) (%)		1.2	0.5
財政収支/GDP比 (%)		1.6	-1.8
債務/GNI比 (%)		8.3	—
債務残高/輸出比 (%)		29.9	—
教育への公的支出割合 (対GDP比)		—	—
保健医療への公的支出割合 (対GDP比)		—	—
軍事支出割合 (対GDP比)		4.5	2.8
援助受取総額 (支出純額百万ドル)		133.1	105.2
面 積 (1000km ²)		1,648	
分 類	D A C	低所得国	
	世界銀行等	IBRD融資 (償還期間17年) 適格国	
貧困削減戦略文書 (PRSP) 策定状況		—	
その他の重要な開発計画等		第3次経済社会文化開発5か年計画	

注) 1. 貿易額について、輸出入いずれもFOB価額。
2. 面積については“Surface Area”の値 (湖沼等を含む) を示している。

表－2 我が国との関係

指 標		
貿易額 (2004年)	対日輸出 (百万円)	120,855.8
	対日輸入 (百万円)	893,214.1
	対日収支 (百万円)	-772,358.3
我が国による直接投資 (百万ドル)		—
進出日本企業数 (2004年11月現在)		13
イランに在留する日本人数 (人) (2004年10月1日現在)		738
日本に在留するイラン人数 (人) (2004年12月31日現在)		5,403

表-3 主要開発指数

開 発 指 標		最新年	1990年
極度の貧困の削減と飢餓の撲滅	所得が1日1ドル未満の人口割合 (%)	<2 (1990-2003年)	
	下位20%の人口の所得又は消費割合	5.1	
	5歳未満児栄養失調割合 (%)	11 (1995-2003年)	—
普遍的初等教育の達成	成人 (15歳以上) 識字率 (%)	77.0 (2003年)	63.2
	初等教育就学率 (net, %)	86 (2002/2003年)	92
ジェンダーの平等の推進と女性の地位の向上	女子生徒の男子生徒に対する比率 (初等教育) (%)	97 (2002/2003年)	91 (1988-1990年)
	女性識字率の男性に対する比率 (15-24歳) (%)	—	
幼児死亡率の削減	乳児死亡率 (出生1000件あたり)	33 (2003年)	46
	5歳未満児死亡率 (出生1000件あたり)	39 (2003年)	59
妊産婦の健康改善	妊産婦死亡率 (出生10万件あたり)	76 (2000年)	250 (1988年)
HIV/エイズ、マラリア、その他の疾患の蔓延防止	成人 (15-49歳) のエイズ感染率 ^(注) (%)	0.1 [0.0-0.2] (2003年)	
	結核患者数 (10万人あたり)	36 (2003年)	
	マラリア患者数 (全年齢) (10万人あたり)	27 (2000年)	
環境の持続可能性の確保	改善された水源を継続して利用できる人口 (%)	93 (2002年)	91
	改善された衛生設備を継続して利用できる人口 (%)	84 (2002年)	83
開発のためのグローバルパートナーシップの確保	債務元利支払金総額割合 (財・サービスの輸出に占める%)	3.6 (2003年)	1.3
人間開発指数 (HDI)		0.736 (2003年)	0.649

注) [] 内は範囲推計値。

2. イランに対するODAの考え方

(1) イランに対するODAの意義

イランは、中東地域における大国であり、ホルムズ海峡を擁し、イラク、アフガニスタン等の隣国であるなどの地政学上重要な国であるほか、世界有数の産油国であり、我が国にとっても主要な原油供給国である。こうしたイランの重要性及び同国との伝統的に緊密な関係を踏まえ、我が国は、イランが中東地域の安定勢力となるようイランに対してODAを実施している。

(2) イランに対するODAの基本方針

経済社会文化開発5か年計画及び1999年7月に実施した経済協力政策協議の方針に沿った案件に対し、技術協力プロジェクト、専門家派遣、研修員受入、開発調査等の技術協力や、草の根・人間の安全保障無償資金協力を中心にODAを実施している。また、自然災害に対する人道的支援として、1990年、1997年、2002年、2003年、2004年の地震災害等に対し、国際緊急援助隊の派遣、緊急援助物資等の供与を行ってきた。

(3) 重点分野

1999年7月に、約10年振りとなる経済協力政策協議を実施し、以下の分野を重点分野とすることで合意している。

- (イ) 農業生産の拡大
- (ロ) 職業訓練
- (ハ) 市場経済移行支援
- (ニ) 環境保全及び公衆衛生の改善
- (ホ) 水供給

3. イランに対する2004年度ODA実績

(1) 総論

2004年度のイランに対する無償資金協力は1.87億円（交換公文ベース）、技術協力は13.26億円（JICA経費実績ベース）であった。2004年度までの援助実績は、円借款810.28億円、無償資金協力36.10億円（以上、交換公文ベース）、技術協力191.46億円（JICA経費実績ベース）であった。

イラン

(2) 無償資金協力

2003年12月のケルマン州バムで発生した地震への援助として、緊急無償資金協力及び草の根・人間の安全保障無償資金協力を供与している。

(3) 技術協力

2002年度より技術協力プロジェクトを新たに2件開始するなど、ハタミ大統領訪日のフォローアップとして対イラン技術協力に力を入れてきている。2005年8月にはJICA駐在員事務所をテヘランに開設した。技術協力プロジェクトとして、「省エネルギー推進プロジェクト」(2003～2007年)、「職業訓練視聴覚教材向上計画」(2002～2006年)を実施中。開発調査については、農業及び環境保全分野における案件を実施しており、2004年には、「ガラス河沿岸農業基盤整備計画」、「大テヘラン首都圏大気汚染管理強化及び改善」、「アンザリ湿原生態系保全総合管理計画」を実施した。

4. イランにおける援助協調の現状と我が国の関与

イランにおける援助協調については、特段の動きはない。二国間援助及び国際機関（UNHCR、WFP、UNDP、UNICEF、WHO、FAO等）の活動について、各国、各機関が人道的な難民援助及び自然災害救助等を実施している。

5. 留意点

核開発問題等、イランをめぐる国際社会の懸念を踏まえつつイランに対するODAを実施していく必要がある。

表－4 我が国の年度別・援助形態別実績（円借款・無償資金協力年度E/Nベース、技術協力年度経費ベース）
（年度、単位：億円）

年 度	円 借 款	無償資金協力	技 術 協 力
2000年	74.94	0.79	12.84
2001年	—	0.68	11.92 (7.92)
2002年	—	1.20	16.84 (12.49)
2003年	—	18.08	20.90 (16.72)
2004年	—	1.87	13.26
累 計	810.28	36.10	191.46

注) 1. 年度の区分は、円借款及び無償資金協力は原則として交換公文ベース（但し無償資金協力については、2000年度は閣議決定ベース）、技術協力は予算年度による。
2. 「金額」は、円借款及び無償資金協力は交換公文ベース、技術協力はJICA経費実績及び各府省庁・各都道府県等の技術協力経費実績ベースによる。
3. 円借款の累計は債務繰延・債務免除を除く。また、() 内の数値は債務免除額。
4. 2001～2003年度については、日本全体の技術協力事業の実績。2000年度及び2001～2003年度の() 内はJICAが実施している技術協力事業の実績。なお、2004年度の日本全体の実績については集計中であるため、JICA実績のみを示している。

表－5 我が国の対イラン経済協力実績

（暦年、DAC集計ベース、単位：百万ドル、支出純額）

暦 年	政府貸付等	無償資金協力	技 術 協 力	合 計
2000年	30.11	0.22	14.54	44.87
2001年	22.05	0.89	11.45	34.39
2002年	3.61	0.76	13.11	17.48
2003年	-6.30	1.72	15.90	11.32
2007年	-11.84	15.88	15.79	19.83
累 計	209.91	24.49	199.22	433.62

出典) OECD/DAC

注) 1. 政府貸付等及び無償資金協力はこれまでに交換公文で決定した約束額のうち当該暦年中に実際に供与された金額（政府貸付等については、イラン側の返済金額を差し引いた金額）。
2. 技術協力は、JICAによるものの他、留学生受入や関係省庁及び地方自治体、公益法人による技術協力を含む。

表－6 諸外国の対イラン経済協力実績

(暦年、DAC集計ベース、単位：百万ドル、支出純額)

暦年	1位	2位	3位	4位	5位	うち日本	合 計
1999年	ドイツ 59.3	日本 48.0	オーストリア 14.2	フランス 9.0	フィンランド 3.3	48.0	138.4
2000年	日本 44.9	ドイツ 37.2	オーストリア 9.0	フランス 7.9	ノルウェー 5.2	44.9	112.8
2001年	日本 34.4	ドイツ 32.6	フランス 6.8	オランダ 3.8	ノルウェー 3.7	34.4	90.8
2002年	ドイツ 31.8	日本 17.5	フランス 7.9	イタリア 5.6	ノルウェー 5.3	17.5	81.5
2003年	ドイツ 38.8	日本 11.3	ノルウェー 9.7	フランス 9.5	オランダ 7.7	11.3	102.1

出典) OECD/DAC

表－7 国際機関の対イラン経済協力実績

(暦年、DAC集計ベース、単位：百万ドル、支出純額)

暦年	1位	2位	3位	4位	5位	そ の 他	合 計
1999年	UNHCR 12.8	UNTA 3.6	UNICEF 1.7	UNFPA 1.2	CEC 0.7 WFP 0.7	2.3	23.0
2000年	UNHCR 11.1	UNTA 2.2	UNICEF 1.9	UNFPA 1.1	UNDP 0.6	0.3	17.2
2001年	UNHCR 11.3	UNTA 3.2	UNFPA 2.1	WFP 2.0	UNICEF 1.8	4.9	25.3
2002年	UNHCR 20.3	CEC 3.2	UNTA 2.6	UNFPA 2.4	UNICEF 1.8	2.2	32.5
2003年	UNHCR 10.8	CEC 5.1	UNTA 3.6	UNFPA 2.3 UNICEF 2.3	—	5.1	29.2

出典) OECD/DAC

表－8 我が国の年度別・形態別実績詳細 (円借款・無償資金協力年度E/Nベース、技術協力年度経費ベース)

(年度、単位：億円)

年度	円 借 款	無 償 資 金 協 力	技 術 協 力
99年度 までの 累 計	735.34億円 〔内訳は、2004年版の国別データブック、もしくはホームページ参照 (http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/jisseki/kuni/index.html)〕	13.48億円 〔内訳は、2004年版の国別データブック、もしくはホームページ参照 (http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/jisseki/kuni/index.html)〕	120.69億円 研修員受入 1,889人 専門家派遣 424人 調査団派遣 696人 機材供与 2,118.12百万円
2000年	74.94億円 マスジッド・エ・ソレイマン水力発電計画 (74.94)	0.79億円 テヘラン大学に対するLL機材供与 (0.31) 草の根無償 (8件) (0.48)	12.84億円 研修員受入 82人 専門家派遣 21人 調査団派遣 75人 機材供与 67.22百万円
2001年	な し	0.68億円 草の根無償 (11件) (0.68)	11.92億円 (7.92億円) 研修員受入 96人 (64人) 専門家派遣 30人 (26人) 調査団派遣 78人 (73人) 機材供与 36.50百万円 (36.50百万円) 留学生受入 178人
2002年	な し	1.20億円 緊急無償 (地震災害) (0.31) 草の根無償 (16件) (0.90)	16.84億円 (12.49億円) 研修員受入 204人 (91人) 専門家派遣 39人 (37人) 調査団派遣 127人 (122人) 機材供与 199.92百万円 (199.92百万円) 留学生受入 200人

イラン

年度	円 借 款	無 償 資 金 協 力	技 術 協 力
2003年	なし	18.08億円 緊急無償（イランにおける地震災害） (0.94) 緊急無償（地震災害被災民への仮設住宅提供） (15.51) マシャッド市貧困地区住民及びアフガン難民に対するコンピューター技能訓練事業 (0.20) 草の根・人間の安全保障無償（22件） (1.43)	20.90億円 (16.72億円) 研修員受入 211人 (105人) 専門家派遣 100人 (96人) 調査団派遣 170人 (170人) 機材供与 240.07百万円 (240.07百万円) 留学生受入 217人
2004年	なし	1.87億円 バム遺跡修復・保存機材整備計画 (1.12) 日本NGO支援無償（2件） (0.28) 草の根・人間の安全保障無償（5件） (0.47)	13.26億円 研修員受入 115人 専門家派遣 19人 調査団派遣 131人 機材供与 51.89百万円
2004年度までの累計	810.28億円	36.10億円	191.46億円 研修員受入 2,415人 専門家派遣 645人 調査団派遣 1,318人 機材供与 2,748.75百万円

- 注）1. 年度の区分は、円借款及び無償資金協力は原則として交換公文ベース（但し無償資金協力については、2000年度は閣議決定ベース）、技術協力は予算年度による。
2. 「金額」は、円借款及び無償資金協力は交換公文ベース、技術協力はJICA経費実績及び各府省庁・各都道府県等の技術協力経費実績ベースによる。
3. 円借款の累計は債務繰延・債務免除を除く。
4. 2001～2003年度の技術協力においては、日本全体の技術協力事業の実績であり、2000年度及び2001～2003年度の（ ）内はJICAが実施している技術協力事業の実績。なお、2004年度の日本全体の実績については集計中であるため、JICA実績のみを示し、累計については2004年度までにJICAが実施している技術協力事業の実績の累計となっている。
5. 調査団派遣にはプロジェクトファインディング調査、評価調査、基礎調査研究、委託調査等の各種調査・研究を含む。

表－9 実施済及び実施中の技術協力プロジェクト案件（終了年度が2000年度以降のもの）

案 件 名	協 力 期 間
ハラーズ農業技術者養成センター計画	99. 7～04. 6
職業訓練視聴覚教材向上計画	02. 6～06. 5
省エネルギー推進	03. 3～07. 3

表－10 2004年度実施済及び実施中の開発調査案件

案 件 名
大テヘラン圏大気汚染管理強化及び改善調査
大テヘラン圏総合地震防災及び管理計画調査
アンザリ湿原生態系保全総合管理計画調査
テヘラン市上水道システム耐震性強化計画調査
ゴレスタン州洪水・土石流対策計画調査

表－11 2004年度草の根・人間の安全保障無償資金協力案件

案 件 名
ウルミエ市オミッド病院放射線医療施設改善計画
テヘラン市ショハダ病院医療機器供与計画
バム市灌漑施設復旧重機供与計画
ラザビホラサン州牛乳加工機材整備計画
西アゼルバイジャン州家禽施設建設計画